にゃにゃ屋短編集

未田　尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

にゃにゃ屋短編集

【Ｎコード】

Ｎ６３６２Ｇ

【作者名】

未田　尚

【あらすじ】

にゃにゃ屋ＨＰのキリ番リクで書いた短編の内、切ない恋や病気の子供などの哀しい物語を集めました。一応「完結」になっていますが、キリ番リクの内容次第で追加していきます。

自由（からっぽ）の空

「お嬢様？　お嬢様ー？」
私を呼ぶ声が聞こえる。でもそんなの関係ない。
私はそのまま空を眺め続けた。
抜けるような高い空。ただひたすら青いだけの、雲ひとつない空っぽの空。
「ああ、お嬢様。こんなところにおいででしたか」
その声に視線を下ろす。ベランダの手すりに身体を預けるようにして、執事がこちらを見上げていた。
コイツは私付きの執事だ。執事といってもまだ私と同じ位の年齢。
それでも一人前の執事として周囲からも認められているのは立派というか、なんかムカツク。
それにしても何故ここがわかったのだろう。見付かるはずはないと思っていたのに。
「そんなところにいては危のうございますよ？」
その執事の声を無視して空を眺め続ける。
この無駄に立派な屋敷の高い屋根の上に寝転がっていると、視界には空以外何も入らない。
まるで自分が自由なのだという気になれる。
私を縛るものは何もない、私に関わるものは何もない、空っぽの自由。
自由だからこそ何もないのと、何でもあるが故の不自由。どちらが幸せなのだろう。
「お嬢様？　降りておいでにならないのでしたら、私がそちらに行きますよ？」
ひとつ、ため息を吐く。
いくら自分の分身と言っていいほど忠実な執事とはいえ、唯一私の自由の場所に侵入者を許したくはない。

「わかったわ、すぐに降りるから待っていなさい」
下の様子を窺ってから、私はぴょんとベランダへと飛び降りた。
翻るスカートを巧みに捌き、あくまでも優雅な仕草で。
このくらいはレディのたしなみ。屋根から下りたら、私は『お嬢様』でなくてはいけないのだから。
「お嬢様！　屋根に上るなとは言いませんが、飛び降りるのはおやめください！」
「大丈夫よ、慣れてるから」
あの屋根の上にはもう何度も上っている。
飛び降りるのだっていつものこと。
「いくら慣れていても間違いがないとは言えないのですよ？　このままでは私の心臓が幾つあっても足りません」
止まってしまえ、そんなものは。
それ以上お説教を聞きたくなくて話を逸らす。
「それはそうと、昨日はいなかったわね。どうしていたのかしら？」
「はい、昨日はお休みをいただいておりました」
それは言いがかりだと分かっているけれど、いやわかっているからこそ続ける。
「誰に断って休んだのかしら？」
「旦那様からお許しをいただいております」
知っている。聞いたから。
お父様が休みを許さなかったかもしれない、と思って確認しておいたから。
「用事を頼もうと思っていたのに。お前は私の執事なのよ。何より先に、私に断るべきでしょう」
責める口調の私に、執事は憤る風もなく頭を下げた。
「申し訳ありません。すっかりと失念しておりました。以後気を付けますのでなにとぞお許しを」
嘘だ。
本当はきちんと一番に私に許しを求めに来た。忘れるはずがない。

散々ごねて嫌味を言って、それでようやく休みを認めたのだから。
それでも私の言うことには逆らわない。それがかえってムカツク。
「あのメイドと出かけていたのでしょう？」
間違えるはずがない。昨日だって、屋根の上から仲よさそうに出かけていく二人の姿を見ていたのだから。
「いいわね、若いってのは。せいぜいよろしくやってなさい」
「え、いえ、彼女とはそういうのではなくて、なんというか、その、えへへ……」
ムカツク。
使用人同士が結ばれるのは決して珍しいことではない。住み込みだからずっと一緒にいて、そういう関係になるのは至極当然だろう。
実際にそうやって何代にも渡って我が家に仕えている者も少なくない。そういう者は、繋がりが深い分だけより信用できる使用人として重宝する。
だから使用人同士が結ばれるのは、主としても喜ばしいことなのだ。
本当は。
「でも、それで仕事がおろそかになるのは良くないわね。私の用事とあのメイドと、どちらの方が大事なのかしら」
「世界で一番お嬢様が大切ですよ」
躊躇など微塵もなく、心底邪気のない笑顔で言いやがる。
ちょとどきっとしてしまったじゃないか。
そしてその言葉は決して嘘ではない。本当に、私のためにならなんだってやる。
ムカツク。
私は自分で箸も持てないようなお姫様じゃない。思うこと全てが叶わなければ我慢ならないほど我侭でもない。
自分のことは自分で出来るし、何を置いても一番、なんて仕えられ方をされたくはない。
「いえ、本当にそういうのではないのです。この間、ダンスのレッ

スンをする代わりに何か差し上げる約束をしましたでしょう？　その買い物を手伝って貰っただけです」
……思い出した。ダンスのレッスンが面倒くさくなって、だだをこねたことがあった。そのついでにもっと困らせてやろうと、何かプレゼントでも買えと言ったのだ。
そんな、言った自分でも忘れているようなことを律儀に覚えていたのか。
……ムカツク。
それはつまり私をダシにデートしてたということか。
私へのプレゼントを買うのなら、そこは私を連れ出す場面じゃないのか。
言葉にならない私の様子に気付かないように、執事は小さな包みを差し出してきた。
「私に買えるものなどお嬢様のお気には召さないと思いますが、どうぞお受け取りください」
「……そうね、せっかく買ってきたものを無駄にするのもなんだし」
複雑な気持ちだったけれど、とりあえず受け取る。
中にあったのは、普段私が身に着けているものからすれば全然安物のネックレス。でもコイツのお給料からすれば、かなり無理をしないと買えないもの。
もしかしたら、メイドとの結婚資金にと蓄えていた貯金を切り崩したりしたのかもしれない。
ムカツク。
「……私の言うこと、なんでも聞くのよね？」
「はい、勿論です」
あっさりとそう言う言葉すらムカツク。
「……だったら、ここから飛び降りて見せて」
それは、ふと思いついただけのただの意地悪。『もう、仕方ないですね、お嬢様は』なんて困った顔をさせたかっただけなのだと思う。

なのに。
「はい、わかりました、お嬢様」
躊躇うことなくそう返事をすると、執事はすたすたと手すりの方へと歩いていった。
それに手をかけて振り向き、背中をもたれかけるようにして私の方へと顔を向ける。
「それではお嬢様。長らくお世話になりました」
そう言って、体重を後ろとへ移した。その足が床から離れ、その姿がゆっくりと……
「ダメっ！」
慌てて抱きとめる。その身体を落ちないように引っ張ると、力の抜けていた執事の身体は意外なほどにあっさりと私の方へと倒れこみ、私達はもつれるようにして床へと倒れ込んだ。
「……本当に飛ぶとでもお思いになりましたか？　そんなこと、あるわけありませんでしょう？」
嘘だ。
コイツは飛ぶ。
私が泣きそうな顔をしているから、そう言わなければ私が泣いてしまうから、そう言っているだけだ。
「……だったら、さっさとどきなさい」
押し倒された姿勢のまま、私は執事を睨みつける。
「え……あ、も、申し訳ありません！」
執事が慌てて飛びのいた。
自分でも頬が紅くなっているのがわかる。
理不尽だと自分でわかっている。でもムカツク。
助け起こそうと差し出された手を振り払いながら、自分で立ち上がった。
「もうしわけありません、お嬢様、その……」
「……いいのよ。今のは自業自得みたいなものだから」
ムカついていても自分の非は認める。人の上に立つものとして、

そのくらいは当然。
……そのくらい、当然なの。
「貴方も、いつまでも私にべったりくっついていないで、自分の為に生きなさい」
さんざん我侭言っておいて今更何を、と自分でも思うけれど、一応言っておく。
「いえ。私はお嬢様にお仕えするために生きているのですから」
昔からそうだった。まだ執事になる前から、物心付く前から、コイツはずっとそうやってきた。
それがいくらかでも変わってきたのは、あのメイドと親しくなってから。
その恋心は、私のためだけに生きてきた……そして今もそうやって生きているコイツの、初めて、唯一持った自分の心。
でも、私のためなら、私の命令なら、それすらもあっさりと、まるで最初からなかったもののように投げ捨ててしまうだろう。
ムカツク。ムカツク。
だから。
こんなヤツのコト、好きだなんて思ってなんてやるものか。

子供の夢

月明かりの病室のベッドの上で、その女の子は一人力尽きかけていた。

「やだよ……恐いよ……苦しい、よぉ……」

生まれてからずっと入院と退院とを繰り返してきたその女の子――留美にとって、死は近しいもののはずだった。

いつ死ぬかわからない。いつ死んでもおかしくない。

事実、今まで幾度となく死を覚悟してもきた。

それでも、……いや、そうだからこそ、今回のこれは今までとは全然違うものだということは分かっていた。

分かってしまっていた。

そして、自分にはもうこれに耐えるだけの体力が無いことも。

「やだよ……死にたく……ない、よぉ……助けて、ぴえーる……」

何かに縋ろうと、ぬいぐるみを抱く手に力を込める。込めたつもりだった。

でも、その手はもう、わずかにでも動くことは無かった。

もう、自分は助からない。

今度こそ本当に終わりなのだという事実は、まだ七年しか生きていない留美にとってあまりに重すぎた。

本当なら、一歳の誕生日まで生きられないと言われていた留美が、七歳まで生きられたという事を奇跡だと喜ぶべきなのかもしれない。

でも、そんなことは関係なかった。

今、留美の命が潰えようとしていることに変わりはないのだから。

咳をする。その時だけ身体が揺れるけれど、身を縮まらせて口を手で覆うことすら出来ない。

咳をするそのたびに体力が奪われていく。

それはまるで、息と一緒に口から魂が漏れ出てしまうように。

真夜中の急な発作に、誰も気付いていない。

毎日の事ですっかり覚えてしまった見回りの時間まで、まだしばらくある。
その時には全てが終わってしまっているだろう。
誰かを呼ぼうにも、もうナースコールを押すだけの力も無い。
それ以上に、ナースコールをしたからといってどうにもならないことを、すでに留美は悟ってしまっていた。
このまま誰にも看取られる事なく一人で寂しく死ぬんだ。
そのあまりの絶望に、いっそ早く終わりにして欲しいと願った、まさにその時だった。
もう瞳しか動かす事のできない留美の視界の中に、ひとつの人影が写ったのは。
ベッドの脇に、誰かが立っている。
音も気配もなかった。
発作に苦しんでいたとはいえ、留美一人しかいないこの深夜の静まり返った病室に、誰かが入ってきて気付かないのはあまりに不自然だった。
でも、苦しむ留美にとってそんな事はどうでもいいこと。
「助……け、て」
掠れる声で懇願する。もう、誰にも助けられないのだということをわかっていても。
それでも懇願せずにはいられなかった。
「私に死の定まった命を繋ぎとめる力はない。物となった死体に仮初めの命を与える事は出来るが」
何かを期待して言ったわけではない。だから留美は、その言葉に絶望しなかった。
せめて自分を看取ってくれるその相手が誰なのか確かめようと、近寄ってきたその人影に目を凝らす。
その人は、あまりに美しすぎた。
いや、人ではないのかもしれない。それほどに美しい。
まだ幼い留美ですら、一瞬苦しみを忘れるほどに。

その瞳には何の感情も映してはいない。今にも息絶えようという留美を前にして、それでも何も感じてはいないようだった。
「私を……連れに、来た……の？」
苦しい息の下、どうしても聞きたくて留美は口を開いた。
死の直前にある少女にとって、漆黒のスーツに身を包み、無感情に自分を見下ろすその姿は死神にしか見えない。
「いや。お前の死に興味はない。ここに来たのは、あまりに強すぎる想いが私を呼んだからだ」
その人――形代の視線が留美に向けられた。
正確にはその胸元に。
「……？」
それを追って留美も視線をおろす。
布団が、もぞもぞと動いていた。留美にはもう手を動かすだけの力もない。動くものなどあるわけがない。
その布団の隙間から、ぴょこんと顔を出したものは。
「ぴえーる……？」
ぬいぐるみだった。いつも留美が抱いて寝ている男の子のぬいぐるみ。
寝る時だけではない。留美とぴえーるは、昼も夜もいつも一緒だった。
「そうだよ、留美ちゃん。やっとお話出来るね」
ぴえーるはもぞもぞと布団から這い出すと、留美の枕元にちょこんと座った。
ぴえーるの大きさだと、ちょうど留美の顔を覗き込む格好になる。
もう頭を動かす事も出来ない留美にとって、一番楽な位置。
「ぴえーる……？　どう、して……」
「その人に魔法をかけて貰ったんだ」
ぴえーるの視線を追って、留美は脇に立つその人に視線をやった。
何も言わず、ただ無表情にそこにいる。その人がぴえーるに何かしたようには見えなかったけれど。

「まほ、う……すごい、ね……」
「いいから、そいつの話を聞いてやれ」
冷たくそう言われても、留美は別に傷付いたりはしなかった。
それよりも、ぴえーるが動いて喋っているということで頭が一杯だったから。
「僕ね、今までずっと、一度でいいから留美ちゃんとお話がしたいって思ってたんだ」
「わた……しも、ぴえーると、おはなし、できたら……いいな、って、おもって、た……」
喋り方は苦しそうだったけれど、留美の顔には笑顔が浮かんでいた。
今までずっと一緒だったぴえーると話をしている。それ以上に重要なことなんて、なかったから。
「初めて留美ちゃんと会ったのは、留美ちゃんの三歳の誕生日だったね」
「うん……おとうさん、が……買って、くれた……の」
「留美ちゃんとても喜んでくれて、その日からずっと抱いて寝てくれたよね」
「ぴえーると、いると……安心して、眠れる、から……」
留美は優しい瞳でぴえーるを見詰めた。
初めて出会った時の事を思い出しながら。
プレゼントの包み紙を丁寧に開き、開けた箱の中からぴえーるが出てきた時の喜びをまだ覚えている。
まだ、たった四年前なのだから。
それでも七歳の留美にとって、人生の半分よりも長い時間。
「留美ちゃん、覚えてる？　僕たちが始めて二人揃って出かけたのは、動物園だったよね」
「うん……動物園で、いっぱい……動物さん、見た……の……」
あの頃は体調も落ち着いていて、留美は自分の足で歩いて動物園を回った。

ぴえーるを抱えて、気に入った動物の前に来た時はぴえーるにも良く見えるように、高く掲げてあげたりしていた。
「お猿さん、が……ね、高いところ……の、ロープに、ぶら下がって……こうやって、渡って、たの……」
布団の中で、留美の手が僅かに動いた。きっと、手を上に上げて綱を渡る猿の真似をしたかったのだろう。
それは果たせなかったけれど、留美の顔は楽しそうだった。
「また入院しなくちゃいけなくなった時、留美ちゃん怒って僕を看護婦さんに投げつけたよね」
「ごめん、ね……ぴえーる、痛かった……よね……」
「僕は柔らかいから痛くはなかったよ。でも、看護婦さんは凄くびっくりしてたから、看護婦さんにはちゃんと謝らなくっちゃ」
「うん……私も、謝らなくちゃ、って……ずっと、思ってた……。看護婦さん、ごめん……な、さい……」
留美はぴえーるに言われるまま、目を閉じて謝った。
そんなことあってからも、その看護婦さんは留美にとても優しくしてくれた。
そのことを謝る事が出来なくて、留美はずっと気にしていたのだ。
「去年の秋には一緒に公園に行ったよね」
「いちょう、の、木が……黄色く、染まってて、……とっても、キレイ……だった、の……」
外出許可を貰って、それでも留美にはもう遠出は出来なくなっていた。
それどころか、もう自分で歩く事も出来ない。
だから車椅子を押して貰って、それで公園を散歩した。
その膝の上にいるのは当然ぴえーる。
「いちょうの、葉が……ぴえーる、の……頭に、乗っかっ……て、おもしろ、かった……」
「留美ちゃんすごく笑うんだもん。ひどいよ」
小さくふふっと留美は微笑んだ。大きく笑うだけの体力もない。

でもその時と同じ、本当の心からの笑顔。
「ごめん、ね……ぴえーる……でも、とっても、可愛かった……あの、はっぱ……まだ、とって……あるんだ、よ……」
「うん、知ってる。留美ちゃんあのはっぱをしおりにして、よく本を読んでるよね」
ぴえーるは留美の枕元に移動すると、そこにあった本を手に取った。
そこに挟まれてるしおりを取り出す。厚紙にいちょうの葉を貼り付けただけの手作りのしおり。
留美が一生懸命作ったものだ。
「うん……本、好き……な、の……ベッドの中に、いても……いろんなこと、出来る……気に、なる……から」
本を読みながらこのしおりが目に入ると、その時のことを思い出して心が温かくなる。
留美が本を好きなのは、それも理由のひとつだった。
しおりの挟まれていた本に視線をやる。

『二年の国語』

留美の一番のお気に入りは教科書だった。
教科書を読んでいると、自分も学校に通っている気になれるから。
でも、留美は学校というものを知らない。
小学生になる直前は体調が良くて、そのままいけば入学出来るはずだった。
大きな発作を起こし、幾度目かの入院をすることになったのは入学式の三日前。
もう四月に入って、『小学生』になってからだった。
だから、看護婦さんにぬいぐるみを投げつけても仕方がない。
六歳の女の子がそうしてしまっても、誰にも責める事は出来ない。
「そうだ、留美ちゃんは学校に行って、運動会でかけっこするのが

夢だったよね」
「うん……運動会、出たい、な……」
学校に行くこと。元気に走ること。
そのどちらも、留美にとっては到底叶わない、憧れの対象。
だからその両方である運動会に出ることは、留美の一番の夢だった。
「じゃあね、僕がかわりにかけっこするよ！」
「ほん、とう……？」
いつも一緒にいるぴえーるは、留美の分身といっていい存在だった。
動けないぴえーるに、自分の身体もまともに動かせない留美自身を重ねていたのかもしれない。
だから、そのぴえーるが自分の代わりに走ってくれるという事は、留美にとって自分が走る事と大差ないことだった。
「うん。留美ちゃん、リボン貸してね」
ぴえーるは留美の髪を縛るリボンを解き始めた。
入院生活では、髪は短い方が楽なのに決まっている。
お風呂にだってまともには入れない。
手入れだって簡単ではない。
それでも、留美は決して髪を切ろうとはしなかった。
女の子なのだから。
そのリボンの端を、ぴえーるはベッドの手すりに縛り付ける。
指が分かれていない手で、おぼつかないながらもなんとかやり遂げた。
「ほら、留美ちゃん。これがゴールテープだよ」
反対側の端を留美の手に掴ませる。
「これが……ゴール、だ……ね……」
力の入らない手で、留美はリボンを掴んだ。
決して離さない。自分の役目を絶対に果たしてみせる。そう決意して。

だって、留美は生まれて初めて運動会に参加しているのだから。
でも、ゴールテープを掴んでもその手を上げる事は出来なかった。いくら気力を振り絞っても、それだけの体力が残っているはずがない。
すっ、と背後から手が伸びて来る。
細くしなやかで、それでも力強い指が留美の手首を掴んで引き上げた。
ちょうどぴえーるの胸の高さ。
留美はその手の先へと視線を動かした。
何も言わず、形代が留美を見詰めている。
「ありが……と、う……」
「かまわない」
相変わらずの無表情。
何を考えているのか分からない視線。
それでも留美は嬉しくて顔を綻ばせた。
「留美ちゃん、よーいどんして！」
その間にベッドの足の方に移動していたぴえーるが言う。
足を前後に開いて、腕を構えて。
スタンディングスタートの体勢。もう準備は出来ているようだった。
「じゃあ……いく、よ……よーい……どん」
留美の掛け声で、ぴえーるが走り始める。短い手足で不恰好に。柔らかいベッドに足を取られながら。
ふらふらして、とてもかっこよくはなかったけれど、でも一生懸命に。
その姿はまるで、生まれてから一度も走ったことが無い子供が、必死に、でも楽しそうに走っているようだった。
最後の最後。布団のしわに足を取られて、ぴえーるはバランスを崩す。
「あ……」

留美のびっくりした声。
ぴえーるは無理な体勢から、それでもなんとか最後の一歩を踏み出して。
ゴール。
ぴえーるの身体にひっぱられて、留美の手からリボンのゴールテープが離れた。
「すご、い……ぴえーる、いっとう、しょう……だよ……！」
つかまれたままだった手を下ろして貰いながら、留美はすごいすごいと何度も繰り返した。
手が動けば何度も何度も拍手していただろう。でも、それが出来ない事も気にならないくらい、留美は大喜びしていた。
「速かった、よ……ぴえーる……ごほんっ、ごほっごほっ！」
「だめだよ、留美ちゃんっ！」
興奮のあまり咳き込み始めた留美にぴえーるが駆け寄る。
「だいじょうぶ、だよ……ぴえーる……ごほっ……とっても、いい気持ち、だから……」
真っ青な顔で咳き込みながら、それでも留美は心から嬉しそうに微笑んでいた。
「だめだよ、留美ちゃん。ほら、ちょっと休もう？」
「うん……そうする……ね、ぴえーる……手を、握ってて……」
「わかったよ、留美ちゃん。ほら、手」
ゴールテープを握った時に布団から出ていた手をぴえーるが握る。
両手を添えて、しっかりと。
「えへへ……ぴえーるの手、あったかいね……」
それは留美の手が冷たくなってるからだ、とは言えなかった。
体温のないぬいぐるみの手が暖かく感じるほど、留美の手が冷たくなっているからだ、なんて。
「ありがとう、ね……ぴえーる。……おやすみ、なさ……い……」
ゆっくりと、留美が目を閉じる。その様子をゆっくりと見守ってから。

「お休み、留美ちゃん。ゆっくり休んでね」
返事を返してからも、ぴえーるはずっと留美の手を握っていた。
涙は出ない。
一時的に命を得たからといって、涙を流す機能までは出来ていないから。
「……それで、どうする。私がここから去れば、お前は元のぬいぐるみに戻る。一緒に来るなら連れて行くが」
留美の髪を梳き、リボンで結びながら形代が言った。
発作で苦しんで乱れていた時よりも、ずっと綺麗に整えられている。
『女の子』として恥ずかしくない姿になっていた。
「……留美ちゃんは、僕がいないと寝られないんです」
「そうか」
感情のない声でそう言って、最後に布団を整える。
留美は、まるでただ眠っているようにしか見えなかった。
自分のやるべきこと、出来ることが終わって、形代はドアに向かい……ふと、振り向いた。
「お前はこれで満足したか」
「はい。留美ちゃんがこんなに穏やかな顔で眠って、もう真夜中に苦しんで眼を覚ます姿を見なくていいんですから。こんなに幸せなことはありません」
今まで、ぴえーるが留美のところに来てからずっと留美の苦しむ姿を見てきた。
今、初めて平穏な時間が訪れたのだ。
「おやすみ」
ただひと言、それだけを言い残し、形代は部屋を後にした。
その前で、手を触れる事もなくドアが開き、通り過ぎたところでまた閉じる。
別に不思議でもなんでもない。
「ありがとうございました」

その後姿にぴえーるは頭を下げた。
出来るだけのことをして、一番良い結果になった。
これだけの終わり方は、望むべくもない。
でも、最後にひとつだけ。ぴえーるに仮初めの命が残っている間にしなくてはいけないことがある。
整えられた布団をめくり上げ、ぴえーるはそこに潜り込んだ。
その中で留美の左手を持ち上げ、そこに身体を挟み込む。
僕にも持ち上げられる重さしかない腕を、留美ちゃんはもう持ち上げられなかったんだな。
それだけで、留美がどれだけ苦しかったのか想像できる。
「お休み、留美ちゃん。……もう、苦しまなくて大丈夫だからね」
だんだん、ぴえーるの意識も遠くなって来た。
もう直ぐ仮初めの命が尽きるのだろう。
もう一度、最後に留美の顔を見上げた。
一緒に眠ろう。
こうやって、留美の腕の中で。
今までも、これからも。
天国に行っても、ここがぴえーるの定位置なのだから。

恋する魔法

夕焼けに真っ赤に染まった教室で、オレは困っていた。
「青木君、好きです。私とお付き合いしてください」
今日の放課後、教室に来てくれと言われた時にこうなるだろうということはなんとなくわかっていた。
沙由美のことは嫌いじゃない。どちらかと言うと好きだ。
クラスでは内気で地味な方だけれど、ちゃんと正面から顔を見ると結構可愛いことをオレは知っていた。
多分そのことは、クラスの男子では俺一人しか知らないはずだ。沙由美はいつもうつむいていて、顔を正面から見たヤツはほとんどいないだろうから。
それに、何かとオレを頼ってくれて、気が付くとオレの後をちょこちょこついてくる沙由美のこと、なんとなくオレも気に入っていた。
そういえば、この間図工の時間に指を切った時に手当てしてくれたのも沙由美だった。
そんな大した傷ではなかったのだけれど、血がたくさん出てあたりは真っ赤になってしまった。
周りの奴等はみんな真っ青になって見てるだけだったのに、沙由美だけはポケットティッシュを取り出して血を拭って、傷口にバンソーコーを貼ってくれたんだった。
ただオレに頼るだけではないそういうところも良いなと思う。
だから、ＯＫするつもりだったんだ。
さっきまでは。
実際に告白されてみると、まだ彼女とか早すぎるだろとか、友達から何か言われるだろうとか、他にも気になっていた隣のクラスの梨香のこととか、彼女なんて出来ちゃうとそっちに時間を取られてサッカーに参加出来なくなるのかな、とか考えてしまう。

それでオレは躊躇してしまっていた。
どうしようか、と沙由美を見る。
沙由美は断られるなんて微塵も考えてない表情でオレを真っ直ぐに見つめていた。
そう思ってしまっているのは多分オレのせいだ。
いじめというほどでは無いけれど、沙由美が男子にからかわれていた時に助けてやったりとか、重そうな荷物を代わりに持ってやったりとか、気を持たせるようなことをしたから。
実際ついさっきまではＯＫするつもりだったし。
そう考えて、またちょっと迷ったのだけれど。
やっぱり付き合うってなると悪いことの方が多い。
「えっと……悪いんだけど、付き合えない」
「……え？」
思いがけないことを言われた、という沙由美の表情を見ているとやはり申し訳ないと思う。
「えと……ごめんなさい、よく、聞こえなかった」
「いや、なんてゆーかさ、別に沙由美のことが嫌いとかじゃないんだ。どっちかって言えば好きな方だし。ただ、なんてーか、付き合うっていうことになると、その、いろいろ大変だし……」
泣かれるのが嫌で口から適当なことを言った。でも嘘じゃないし。
「えっと、私のこと、……好き、なの？」
「うん、どっちかっていうと、好き」
沙由美の機嫌を取ろうと慌てて頷いた。付き合うのも大変だけれど、フッたというのが知れても大変だ。異様に結束の固い女子に集団で無視されたり、取り囲まれて昼休み中ずっとねちねち言われたりするのはゴメンだった。
「そっか、私のこと好きなんだ。よかった、魔法が効かなかったのかと思ってあせっちゃった」
……魔法？　ホイミとかケアルとか？　なんでここで？
「じゃ、付き合えないっていうのは魔法の効きが弱かったんだね。

やっぱり血の量が足りなかったのかな」
血？　血ってなんだ？
意味がわからずに、オレは首を捻った。
そんなオレに構わずに、沙由美は下げていたポシェットに手を突っ込む。ポシェットというにはかなりデカいバッグ。沙由美がいつも下げていて、必要なものはなんでも入っているとクラスの連中から重宝されていた。
中から取り出したのはビニール袋。何か赤いものが入っている。白地に、黒に近い赤色がこびりついた……
「ティッシュ……？　これ、もしかして……」
オレと沙由美と赤く染まったティッシュ。思いつくのはひとつだけだった。
「うん。この間青木君が怪我した時に血を拭いたティッシュだよ。他にも青木君に貸してあげた消しゴムとか、使い終わった割り箸とか、密封して取ってあるんだよ。掃除機で吸って真空にする奴！」
嬉しそうに言う沙由美の姿に、俺はその時になって初めて恐ろしいものを感じ始めていた。
隣の席の沙由美には、いつもエンピツとか消しゴムとか借りている。
それにたまに割り箸を使った時とかも、何も考えずにゴミ箱に捨てていた。まさか、それを拾っていたのか？
「それでね、この血で青木君に魔法をかけたの。私を好きになってくれる魔法」
おまじないみたいな奴か？　おまじないならクラスの女子の間で評判になっている。オレにはまったく理解できないけれど、沙由美も女子だからハマっててもの不思議じゃない。
でも血を使うって……
「梨香ちゃんたちに教えてもらったの。隣のクラスの朱美ちゃんもこれで両想いになったんだよ。好きな人の血に魔法の呪文を唱えてずっと持ってれば、その人も自分のことを好きになってくれるんだ

って」
相手の物を持つっていうおまじないがあることは知ってる。クラスの女子達がよく話しているから。
でも、血というのはいくらなんでも……
「だから、ちょうど持ってたこれを使ったの。でも、効きが弱かったみたいだね。やっぱりこれじゃ量が少なかったのかな。貰ってから時間も経ってるしね。もっといっぱい、新鮮な血が必要なんだね」
沙由美がオレを上目遣いに見つめてくる。
普段なら可愛いと思っていたその表情も、今はオレの背筋を凍りつかせるものでしかない。
「だから、もっといっぱい血を頂戴ね？」
沙由美は、いつのまにか再びポシェットに突っ込まれていた手を抜き取った。
その手に握られていたのは一本の包丁だった。小ぶりな果物ナイフ。
「青木君だって、もっと私のこと好きになりたいでしょう？　だって青木君は私のことが大好きなんだもん！」
おかしい。明らかに言っていることがおかしい。
オレはよろよろと後退く。包丁よりも、沙由美自身の方が恐ろしかった。
「大好きだよ、青木君。青木君のことしか考えられないくらい。青木君も、私のことしか考えられなくなりたいくらい、私のこと好きだよね？　だから、もっと強く魔法をかけてあげる！　そのために、もっといっぱい血を頂戴ね！」
逃げなくちゃ。それだけはわかっていたけれど、恐怖で身体が動かない。沙由美から視線を逸らすことが恐ろしくて、後ろを向いて走り出すことも出来ない。オレに出来ることは、ただよろよろと後退ることだけだった。
不意に、がっ、と足に衝撃を感じてそのままオレは床に投げ出された。

誰だよっ、こんなところに椅子を出しっぱなしにした奴は！
「ね、青木君。血の中でもね、心臓から直接出たのが一番効果があるんだって。大丈夫だよ。心臓から出た血なら、量は少しだけでいいんだって。それだけで青木君は私だけのもの！」
「うっ、うわぁぁぁぁぁぁっ！！」
ちょうど手に触れていた椅子を力任せに沙由美に投げつける。それが当たったかどうか確かめもせずに、オレは慌てて走り出した。
走り出そうと、した。
「もう、青木君ったら」
そんな風に可愛らしく微笑む沙由美の声が聞こえたのと同時だった。
背中に衝撃を感じて、オレはまた倒れ込む。
倒れた時に打ったらしい。頭がくらくらする。
それでも命の危険を感じて必死で視線を上げた。
「駄目だよ、青木君。私たち愛し合ってるんだから、離れ離れになっちゃいけないの」
頭から血を流した沙由美が、それを拭いもせずに微笑んでいる。
オレが投げた椅子が当たったのだろう。あれだけ血が出ているなら相当痛いはずだ。
なのに、沙由美は何もなかったように微笑んでいる。
その右手に包丁。
その左手には血に塗れた椅子。
多分、オレが投げつけて沙由美に血を流させたヤツだ。
これでオレも殴られたんだろう。これだけの傷を負わせた椅子を受け止めて、しかもそれで殴りかかってくるなんて。
もう沙由美は普通じゃなかった。わかっていたけれど、もう気のせいだなんてごまかしようもないくらい。
「でも、そうだよね。青木君の血を貰うんだから、私の血もあげなきゃ不公平だよね。その血で青木君も魔法を使おう？　私ももっと青木君のこと好きになりたいもの！」

逃げたかったけれど、平衡感覚がやられて立ち上がることも出来ない。
頭を振って意識をはっきりさせようとしたけれど、めまいが更にひどくなっただけだった。
「愛してる、愛してるよ青木君！　でも、もっともっと、もっと好きになるの！　頭がおかしくなっちゃうくらい！　気が狂っちゃうくらい！　いっぱい血を貰って、いっぱいいっぱい魔法をかけるの！　魔法をかける時間はいくらでもあるよ！　だって愛し合う私たちはずっとずっと一緒だもん！」
なってる、もうおかしくなってるよ！
叫びたかったけれど、まだ頭がぐわんぐわんする。
ちくしょう、なんで教室の床ってこんなに固いんだよ！
「そうだ、いいこと考えた！　青木君の血と私の血と、両方混ぜるの！　絶対もっとすごい効果が出るよ！　きっと二人が離れられなくなっちゃうの！　だって、血を混ぜたらもう分けられないもの！
青木君と私の心臓のところに穴を開けてね、その穴を重ねるの。私の血が青木君の心臓の中に入って、青木君の血が私の心臓の中に入るの！　すっごいロマンチックだよね！」
ロマンチックってどういう意味だっけ？　こういうのがそうなら、オレは絶対にもう二度とそんな言葉は使わない。
「心臓の血を混ぜるって凄いよね！　そしたらきっと魂まで混ざっちゃうよ？　私たち本当にひとつになるの！　そしたら死んでもずっと一緒だよ？　結婚するときに死が二人を分かつまで、って誓うけど、それよりもっとすごいの！　結婚もまだなのに、それよりもっとすごいことしちゃうんだよ！」

頭が痛いのを無視して起き上がろうとした俺の上に、落ちるてくるようにして沙由美が馬乗りになった。
倒されてまた頭を打つ。床についていた手も捻ったらしい。力が入らない。
「まず魔法の呪文を唱えなくっちゃね。
『ネウヨシクハクコトンヤチ・ヨダソウテンナウホマ』」
沙由美が本気だって事は見ただけでわかっていた。逃げなくちゃいけない。
でも馬乗りになられて、意識が朦朧として、手首には力が入らなくて、沙由美を押しのけるだけの力も入らなくて。
なんとかしようともがいているオレに向かって、
「えい」
本気で死んでも一緒だと思っているからなのだろう、あっけないほどにあっさりした掛け声と共に、沙由美は包丁を振り下ろした。
血が噴出すまで意識が残ることも無いくらいの、即死。
オレに馬乗りになった沙由美が、本当に幸せそうに微笑んでいる。

それがオレの見た最期の光景だった。

恋する魔法（後書き）

キリ番リクしたい方はにゃにゃ屋ＨＰまで。

「にゃにゃ屋」

ｈｔｔｐ：／／ｋｔｍｈｐ．ｃｏｍ／ｈｐ／ｎｙａｎｙａｙａ／ｔｏｐ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6362g/

にゃにゃ屋短編集

2010年10月8日15時33分発行